

## The Difference Between Assimilation and Losing Myself

3年1組39番 佐竹実花

アメリカでの交換留学中、ラーメンをフォークで食べるというのは、私が学んだ“最も予想外のレッスン”のひとつでした。ただラーメンの食べ方ではなく、「周りに合わせようと必死になっていた自分」を象徴する瞬間だったのだと思います。

留学前、私はなぜアメリカに行きたいのかを多くの人に聞かれました。今思えば、私の答えはとても浅く、「よく映画で見るアメリカの高校生活をしてみたい」という夢でした。しかし一年後、私が手に入れたものは“アメリカの高校生活”だけではありません。今でも心に残り続ける問い「アイデンティティとは何か？」という問いでした。

日本には「和の精神」という言葉があります。これは協調や調和を重んじ、個人よりも集団での協力を優先するという古くからの考え方です。この文化の中で育った私は、“目立たず、周りに溶け込むこと”を自然と身につけていました。それがどれほど自分を形作っていたのか、留学するまで気づきませんでした。

アメリカには、この「和の精神」は同じ形では存在しません。人々は自分らしさを堂々と表現し、それを大切にしています。私は初めて、「ただ自分だけで周りとは違う」という感覚を強く味わいました。たとえば、私は学校で唯一の他の大陸から来た唯一の英語が母語ではない生徒でした。最初、みんなは私を「新しいアジア人の子」と呼んでいました。それは決して悪意ではありませんでしたが、自分の存在が“アジア人”という一つに言葉にまとめられたのは初めてで、日本のように見た目も意見も似た人ばかりの環境で育った私にとって、とても衝撃的でした。

私は必死に馴染もうとしました。普段履いたことのないレギンスを毎日履き、大好きな日本の海鮮のお菓子を学校に持っていくのもやめて、自分のアクセントをなくそうと必死に練習しました。そしてその一つが、ラーメンをフォークで食べることでした。もちろん、フォークでも十分美味しく、同じ味です。でも、ずっと箸で食べてきた私が、周りに合わせるためだけにフォークを使っていることに気づいたとき、胸のどこかに引っかかりがありました。私はどれほど自分を変えようとしているのだろう、そう思った瞬間、私は初めて「同化すること」と「自分を失うこと」は違うのだと理解しました。

それから、私は“自分を失わずに新しい文化に適応すること”を意識し始めました。自分のアクセントを恥ずかしいものではなく、自分の出身地を思い出させる大切な印として受け入れられるようになりました。ラーメンの出来事は、そのきっかけでした。そして少しずつ、自分のコミュニティを築き、自然体で人と関わるようになったとき、誰も私を「新しいアジア人」ではなく、「ミカ」として見てくれるようになっていました。

この経験から学んだのは、「文化に適応するために自分を失う必要はない」ということです。自分らしいままで、居場所を作ることはできる。そう確信する一方で、「では、様々な文化や人種が交わる中で、アイデンティティとは何なのか？」という問いは、さらに深まりました。答えを見つける前に、私の交換留学は終わってしまいました。

一年では足りませんでした。しかし私は今、答えを探し続ける場所がどこか分かっています。それは、“初めて自分が何者なのかを考え始めた場所”、アメリカです。再び挑戦し、自分を成長させ、同じように悩む人たちと経験を共有したいと思っています。

次のアメリカ留学は「二度目」ではありません。  
それは私にとって“新しい始まり”です。

